



6 7 8 9 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

門15
卷22
508



經渭能介，渴與清。
孤兒未必從他姓。

立女身山止肯，墮風塵。
一女何曾待二人。
黃泉要見骨如銀，
遇客聞之每慘神。

是元至正十二年，紅巾賊殺而掠れ。附江西の吉安
設城。廩家の婦、賊よ掠得され、其事と賣られ
て恐れ、一兒を又一壁上に絶命比辭と號して自尽
せしを丈丈と之を歎く。许も名を續かず
婦人よりつゝ眞烈なると稱しつ。

。我俗ア南都奥福寺マニ華原聲石リナラシヒ江濱
石トニス硯ナリトミシツナギナリトニ應麟^ル玉海^{ムカシ}
通典曰江濱石可為段石近代之自華原云華原聲石も
江濱の石にて作れどものにかくと考スルリ謬傳也ト今
ヒテアシテ江濱不耳^ス音清亮リキモ極すに我府城
東高岳院^ト古石塔^{タツ}レ^ル酒井氏の書法名^ト月夜^{ムカシ}打^ハ音鉦^{タツ}の如^ク諸
人^ハ之^ヲ以^ハて藝蹟^{アシタツ}レ^ル石塔を代^ハし彼音^ヲ
石^ハハ^シタル^カ也^ト此般^{ラク}之^ヲ聲^ヲ作^ハ石^ヲ乞^フト^シ
アシテ^シ也^ト玉^ミ行^スモ^レ足^ナ斬^レト^ニ氏^ハ事^モ多^ヒ

出^{アハ}仕^ヘ候^フ

。江^ノ島^シ席^シ琉球^{イー}本草附錄^ト謂^ハ江^ノ一名江離子^ニれを^シ
檜^ハ心^ヲ草^ハ似^ト三^角ナリ^ト席^トも^シト^シうの書^ハス^ト之^ヲ
。孔子家語^ト果^{ハシ}屬^百六^ハ而^{ハシ}桃^ハ下^{ハシ}年^紀不^レ用^ト之^ヲ而^{ハシ}之^ヲ
僕^ハ唐^ハ桃^ト果^{ハシ}一^行而^{ハシ}殊^ハ目^ハ不^レ見^ト之^ヲ而^{ハシ}之^ヲ
祭^ハ祀^ト用^ハ之^ヲ而^{ハシ}桃^{ハシ}避^ハ之^ヲ而^{ハシ}神^ハ事^ハ之^ヲ
る^ト書^ハ之^テ諭^ハ者^ト之^ヲ
。近^ニ年^ハ袖^{ハシ}之^ヲ而^{ハシ}甚^{ハシ}大^{ハシ}果^{ハシ}有^{ハシ}サボン^トサハサニ^{ハシ}ト
ム長崎^ハ阿蘭陀^ト之^ヲ本名如何^{ハシ}是^{ハシ}橋^譜ト

前謂朱染ミツシキ、れん、真大マダき者、圓尺三寸カヨミすはあらそり也
又曰信濃柿シナヤシとぞりやサチサ柿ヤシはりとぞりうそへあらそり也
曰ク、これ君遷ツシヤシ子コノコのすと
因コ、柿ヤシの文字モチと記メモす

君の事
西村の文
木淡白柿
木淡白柿
火柿
麻柿
梅

○同礼云春秋祭禁。禁爲命切音諱。
禁ニニツシミウヌ又ハ平声于一平切。

氣キ吐トキすらされば夜漏ヤメりとト病ヤマめゆと傷ヤハ
取繁ヒラタコは死シの氣キと呑ドクむをムくわ縁ハナモチのこコとて慙ハラハラとトし
證音シヨウイニ、飄ヒラタコりて酒サケ喝ハヤシよ修ツバメめ禮ハセマツ用ヨウめれとト巻ミクとト云アフ

朱子不自棄文一篇八聲 溥祝氏
頃々述也、うき
禪悟と教言、奢徹と懲心、
事ハ天下後世の爲の
明嘉靖二十年貴州老參議卷尾
よ一語と添て梓

明吉加音二十年貴翁老參譜
我東都板竹延室
乙年の刊行

星彩滿一天朝北極源流足處赴東溟

為臣爲子不忠孝

晉負宣尼一卷經

宋洪蓮り万首唐人絕白の六十九才也

秀經刊詔の倭板ハ山崎敬義翁明暦二年梓行す

ト下よえの字られ年号改元の歲とぞ一年といふ

トやえ史ニ百世祖之至え一年也

○元ノウタケル書と申れ龜の名と見ゆて

朝熊
晉記

長歎溫故圖

又此のうきかく浦のうわま地ゆて書きども

玉之文琉球王子リテの匂きく内ゆるをすひ所也
と或人波在せのあとじきく止うるも冬のゆ

キ遺しきと捨ひて一巻のきくをもせよ

竹みづらにいざりすめりりぬ被に又病と

んすもうつあらわすかうかうそ多後の

とくうううわせんとてあく風とゆてや

トナ高嶋記事と号してをりの所から博

のきつけて高りの神とありれどもひづくひどものを

出で街頭と望やぞ承心裕利の客東西に馳セ治客

失路の漢南北に迷ふ入て砌下と廻りて令柱走

げとく風よ蕙し紫蘭落とし病よ頬く獨處

四境の教と聞き言葉流弊刀の聲

サクシテ

蹠の声乃^フ或々物^{ニキナ}経^{ニシテ}念佛^{ニシテ}の声或ハ童^{ニシテ}童^{ニシテ}の
聲^{トモ}ノ^{ニシテ}白^{ニシテ}兒^{ニシテ}帝^{ニシテ}の
聲^{トモ}す多^ア年^{スル}丈^{スル}也^トと觀^{スル}べく功^ト試^ヘへ^{スル}事^トひ
べく^{カナレ}し、^ト車馬のいそゞ^ゲうる雞^ハの里^ヒ
あをほれ^ハ常^ニにもまくう^リ移^ハ廢^ハ病^ハにまく^ス
旅^ハ鴈^ス音^ハき^ス運^ハ跋^ハ葉^ハ歴^ハ止^ハ穀^ハ平^ハ
ほ^リ暫^ハ間^ハ空^ハ了^ハ眼^ハり^ス万^ハ籠^ハ苦^ハ止^ハ四^ハ壁^ハ寂^ハ
と覓^スて残^ス巻^トうれ^ス涼^ハ床^月白^ハく^リ隱^ハれ^ス
一枚^{カズ}の縫^ハと^スの^ス丈^{スル}騒^ハ靜^ハ外^境に^ハり^テ一心
解^ハこ^ミに誘^ハひ^ス取^ハひ^スよ^ハれ^ス愁^ハれ^ス愁^ハれ^ス虚^ハ妄^ハ
う^リう^リ時^ハ去^ハて^ス夏^ハの^ス如^ハ一^ス方^ハす^ス凸^ハ凹^ハう^リ時^ハと

水^ハ冰^ハわ^ハと^ス一^ス厭^ハ之^ス綠^ハ水^ハ乃^ス猶^ハ岩^下月^ハ白^ハ雲^送送^ハ

鷹^ハ頭^ハ山^ス

○三部密記五智の事^ト—法界の一体性轉^トて四
智^トか^ク

轉^ハ第八識^ト成^ハ大^ハ圓^ハ鏡^ハ智^ト佛陀^部
轉^ハ第七識^ト成^ハ平等性^ト智^ト金剛^部
轉^ハ第六識^ト成^ハ妙^ハ觀察^ト智^ト蓮華^部
轉^ハ前^ハ五識^ト成^ハ所作^ト智^ト羯磨^部

是住一大法界^ト体性^ト現^ハ五相成身^ト妙^ハ智^ト發生^ス三十七尊乃至
專會一切聖^ハ象^ハ万^ハ像^ハ形^ハ色^等尔^ハくしきれ^スぞ異^ハ

○越路に移り候る人の便はほんと文と
我居北海君南海寄鴈傳書謝不能をと山谷
古の詞をも書とくむれり所れよとて
竹の名月の花もすつづくにゆく

君惄北海我南海 秋月秋風不_レ秋
旅鴈一声暮煙裡 江山千里渡双眸

○技竹ハ妙_レモ竹ナリ王子敬_レ竹譜乃じ珊瑚代

醉翁子見

麵茄眼_レの平八_レ暈_レ芳譜滇南雜記_レ半夏の生

じらの娘_レ秋の生_レ枯_レしうれ

南方温地にうでハ長セガラムヤ

○繪の具の綿_レ胭脂ハとと_レまの生葉_レとと_レて

え汁_レと繡_レにひく_レひがりに_レあわう_レ紫_レ部

和_レ一_レあき_レ古_レの陰_レの圓_レかく_レぬる_レ

○十婦殊_レ花譜に_レ錦_レ帶_レ花_レと_レヒ_レ花_レ今_レ疊_レ錦_レ花_レ

檀_レ俗_レよ_レの木_レ

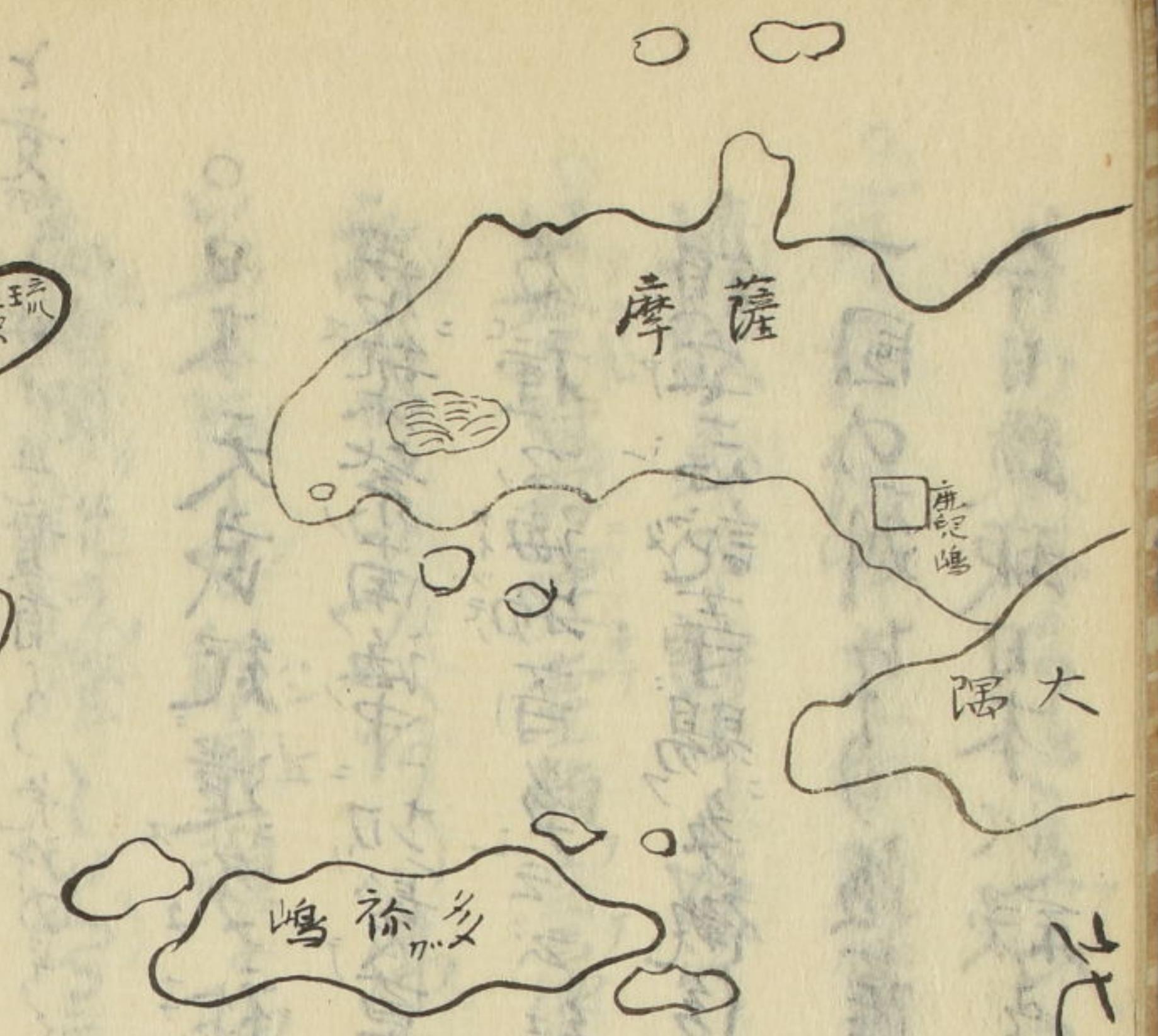
○松披の二字互_レよスヤ_レとキ_レ訓_レスヤ_レとは直_レ木_レ
の轉語_レマキ_レ真_レ木_レぬがり謂_レ佐歌_レにまくのテ_レ

すらるもまよき山をもれり松の木のゆきとくや
○藤澤清淨充寺現住の僧巡回するを遊行上人といふ山
崎敬義の詩に遊行遊食是修行類書寫真要に色互に
以今時好連臺類立高巖巒以爲權利者謂之遊行ト
称はれりとく行佛者よりかばこれ浪葛遊食の云云行を
シムラクス般舟讀よ佛土の相を以て或坐或立遊行觀到
處唯聞詭法聲とシテ文字には利觀欣悅懌して常羊等
と云ふことアマ

因云時衆ハ甚寺開祖の号を以、僧の名と藤澤
道場他阿弥と称し我ガ民城西萱津道場、梵阿ヒ
称する魏を諸國名同ド生る間ハ其阿ヒ自称也又
に呼れり
波瀬舞音 游行上人ハ現住の阿寺より住セドテ他列トセグ
と他河ヒ称
未寺の因上座 売リ歌学を業ムテ諸宗よりさ夙信ナリ
と其阿ヒ
と貢阿ヒ称す是舞音ヒ免許の号

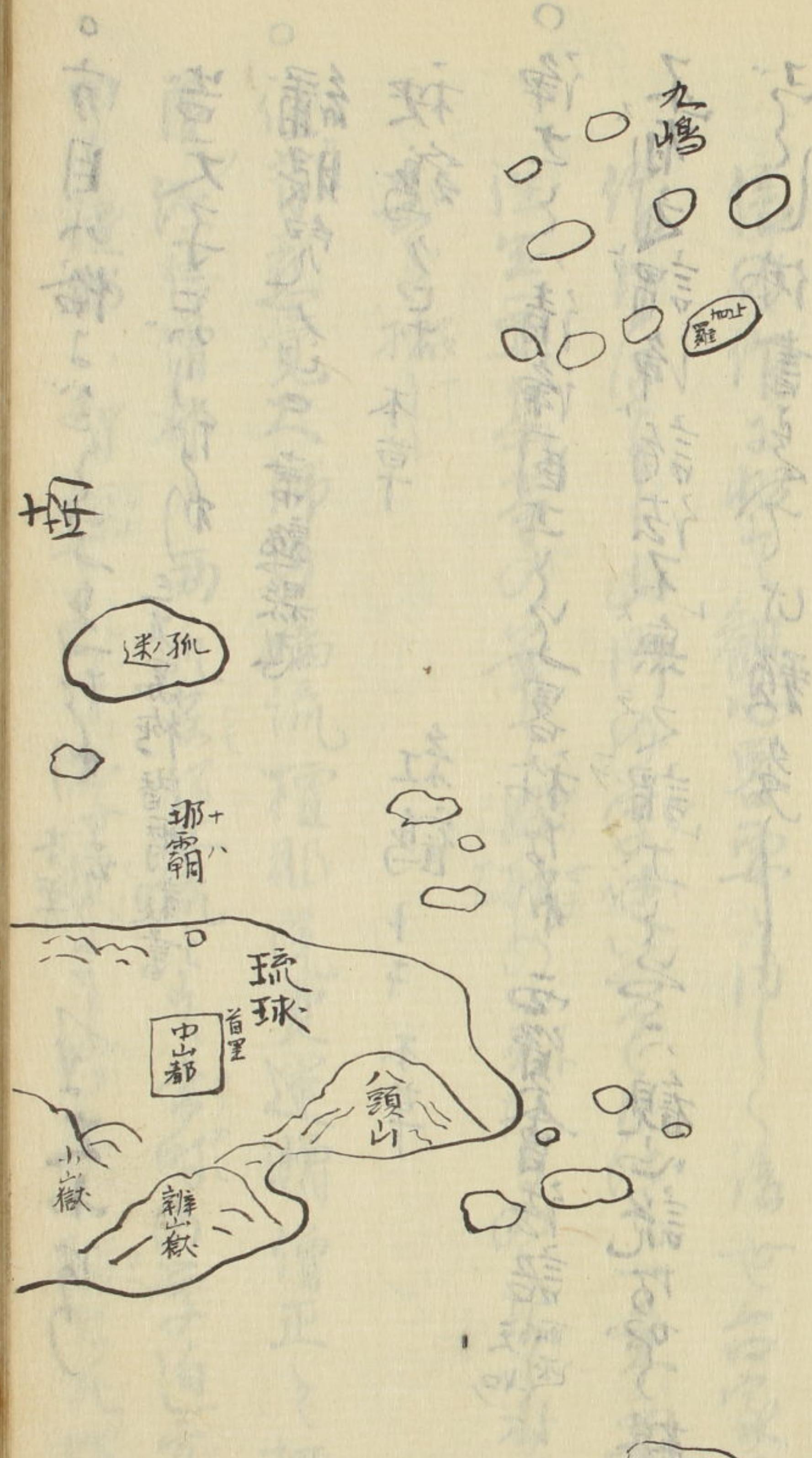
○日本天武紀遣多祐鳴便人等貢鳴圖其國去京五十金
居築紫南海中一切鬱草裳粳稻常豐ニ植兩以土先丈子莞子
及種々海物等多云云統日本紀天子五年多祐島熊毛郡大
領安志記寺賜多祐後因造姓云云按此時ハ多祐鳴ト
一國の列ナリ後薩摩國と號セリ今ナリこれと云ふ事
今日疏遠日本に隸シムトモヤ

西



國造木紀作多祿 武備志 明言
他危久子 云 云
多祿首有能滿壽 救四郡 天長元年
九月三日 大政官首停メタ 称鳥山司 緑大
隅國云見 類聚三代格第五

○○
唐書云謂邪古是也推古天皇三十一年二月拔玖
歸化之言又見日本書紀一ノ年然古比加加富翁
玖



。方目ハ俗よハシと子島ナ利 本草 トキナリ

本草

告天子ニハリナ利

三才易經潛脣親書

繡眼兒ノジロ 常熟縣志

秧鷄クニナ 本草

紅鶴トキ 本草

○豫立トハ清淨國土トシテ畧称ナ利 西賀會法語天理に諸法而述

不有之謂諱

詔法不無之謂工トシテハ觀心説ナカツ 謩書ナガ

ゴクシ佛書ミテケ類多

○清歩納言ト隨筆ト松又御シ勤モ春陽抄シラサウヨ勤モ比
解行也梅庵モ忠四僧都ニ教五時自受月シマツノムシト
記せる書を松又御シ勤セヨ其序モ書置庄右夜キサ

宣枕上字アマツト云故ニ号トセキト清歩納言も亦同時の

官也ナ利櫻川の記ト故テ勤セヨヒヤトスルハ利

源信枕双紙長保三年三月の作一巻ヨリ利訂書源

信の作ニテ觀心要領く活セ台家乃私

作ノアリ山門の字使シテクノモ一章要次及

注生要集等の筆アマツトメテの玉枕のうちより解義

喜び松

○佐前慈寛工師の嫡流檀那院覺運贈僧正ト擇嚴院源信僧都ト西流芳に正流トシテ章門の字直安海師曰く檀那ハ智深れども字復ト峰んで超然榜嚴ハ

字情^{ヒル}ひくも智^シ湖^ク一^{イチ}擇^{セレクト}て歩^{ハシ}くと^シしと^シ也^シ源信^{スル}
弟子寂照^{シキザウ}とて天台^{テンペイ}十^トて祖^{シテ}明^{ミツ}の法^{ホフ}智^チ尊^{スル}者^{シテ}、台宗^{タブ}の問
目二十^ト條^ト書^{カケル}て答^{カケル}釋^{スル}と^{シテ}請^{カケル}よ安^{アシ}海^{シマ}其^ノ目^ト見て是^{シテ}華^カの
僧^{フギヤ}龜^{カニ}山^{ミヤマ}遠^{アリ}間^ト來^{カム}や^シ即^シ上中下三^ト卷^{スル}と仰^{カケル}て曰く
宗國^{スル}の名教^{ナミエ}は三^ト種^{スル}よ^カ一^ト既^{スル}て寂^シを後^{スル}よ法^{ホフ}智^チ大^シ師^{シテ}
答^{カケル}釋^{スル}事^{アリ}多^シく、海^{シマ}師^{シテ}中下^トの義^ヒに^{シテ}うん^{シテ}法^{ホフ}智^チ、螺^{スナ}溪^{カニ}
二^ト世^{シテ}私^{シテ}派^{ハシマ}の正傳^{セイデン}台^{タヘ}寂^シ中^シ興^{スル}の各^カ師^{シテ}にて^{シテ}惡^ミ雲^ク天^テ師^{シテ}遵^{カシム}
德^{タケル}きつ^{シテ}自^カ知^ルふ^タ云^ク類^シの英^{エイ}哲^{セイ}ひ^シ一^ト山門^{サンモン}人^{ヒト}な^シま^ス
二十七^ト回^{カタ}苦^シ佛^{ボク}祖^{シテ}通^{カシム}紀^{スル}よ^カ

○ 宝永七年庚寅天下巡察使を 余ト^{シテ}今^{コト}亥^{サカ}年
卯^トの秋凡^{シテ}諸侯群牧に領^{アカナ}す 台諭一紙^{シテ}此^シ
諸道巡檢使言上^{シテ}赴^{カシム}に朝^{カシム}國郡^{シテ}治^{スル}否^{シテ}
御^{シテ}聽^{カシム}小達^スる氣^{アリ}即^シ科^シ私願^{アリ}内^シ問^{カシム}其^ノ善政^{シテ}特^シ
著^シれ國^{シテ}之^ヲ取^{カシム}かく^{シテ}抵^{カシム}風俗^{シテ}政事^{シテ}頗^シく
四民^{シテ}一^トに^{シテ}困窮^{スル}よ^カせ^シ也^シ
國^{シテ}召^{カシム}而^{シテ}憂^{カシム}慮^{カシム}を^{シテ}湯^{カシム}が^{シテ}水^{シテ}也^シ故^{シテ}也^シ
仰^{カシム}代^シの日^{シテ}保^{カシム}近^シく日^{シテ}ハ

愚言仰旨有之、みうらきてひまく仰乳向、半身ハニシ
自今以後仰料乃以役人國郡の諸領主れ大比
政變ヒツカ解シラヌる所けく、官民各其生を過トガじ
べーて、所地日に勤キラて、舊而弊下於改ナシアラメましゆけき
にねあてハ嚴行其法キラを仰アシらざき申シテ
仰セ去ハタハタ者也。

正徳元年八月

右八月十五日被仰出セサム

風俗上所化日風、
下所習日風ト教化江道業誨人謂之教、朝行
古一へ小学校を設て行藝と修め大學校を建て
道德と明アキラカけり故に風化上に平ハシマくして習俗
下に夷ヤクシけりし後世小學の教育スナれて人才劉表し
大學教育ヤシて義理明アキラカて才を急て朱子大
學乃一書と修て天下わざく真西山術義を
述して時君と諭サトえ皆是道と正ハシマ一風俗と改め
通ハシマけてよほヨホとひ是文モロコシアヌス、實を取ハシマひ至
理と當モドクく、これを身セムに考ハシマむと知ルて徒ハシマ論說モラフ
口耳ハシマ乃賛ハシマくよろよらすと要言を傳ハシマて止ム

身至る事痛づかへりや

心通し題や。この書物、何人の因や一事はもま
も中よきも思ひゆりや」と二三余が
併れえうきか裏へ改め

互の通じに立すと云ふ者、心と知らずくや
にうき因の内の穀とめて今日食て包み修ふると
も角、内に有つて、實よ益みれど、下き百年
と歷ててもあらん、穀子の生れはほんと古び
細り置一ほとと年、春苗、火災し實一
うなげ去るの穀子、惜まや、互と取とは

壬午年の背り、年にして作へ穀一ひよもく
三代の内の穀、全玉あるより、又ぞ是と並
もあらう、三代の季孔子脩り給ひ、遺稿と云
謹唐の註者、作り、事と云ふ、定れば無じゆく
らうと、而作て、其に、是事、也御尊
とひて、然、傳て、身にけしゆく、古の通今れどそ
ニ通り、而經書ハ通と載すれど、是事と云ふ
ねても、通と脩るゝの取法、うち其法にて
考へ、人氣化の内、もうどんに、これも天下古と爲
のゆき、そとも開くことと云ふすれ候

おの法と教へ給ひまことにすとまでも、お酒とゆうう
まくらをみたの初よはじにれくの御酒もとるのくの
ゆ酒もあうゆす。又、ゆうゆうの邊をま
立せだもとく、

くのゆふぬ／＼はま／＼はま／＼書く
わんこ／＼まの傳承とま／＼わせれけ／＼見く
も、平字れまきとは承け／＼うゆう／＼て一宇
も／＼わゆれいみれ／＼れい故／＼くにえひ善りと
ま／＼れとく、ゆ／＼か／＼過のや／＼きむゆくと
ま／＼と數てえ／＼せ／＼ざれど又、さがすみのく
とがゆき事もとわひてゆ／＼きと、譽／＼是
もかくのね／＼きと

お河／＼は國／＼水の轟／＼て瓦力／＼無ひ方セ／＼れ
ど地境／＼天のうちれ御／＼カの及／＼はれり
但／＼河よ修／＼くのうれ禍／＼れとあげ／＼き
事／＼とれ主／＼御とぬじもとくにう／＼百町の蟹田
とね／＼さとく、地にとす耕／＼へす能／＼き御／＼事
境と志／＼或／＼水と運／＼流／＼んとすれ事／＼事
あ／＼放／＼破／＼地にとす耕／＼へす能／＼き御／＼事
の壁／＼う／＼民の役／＼にあ／＼くの御／＼

うまうげとくもよみを波の害とされ地形よさき
中筋よ筋堤塘と能^{モト}が故よ洪水にひま定破^{ヤハ}え
くめ方^{カス}やも金をあ^シも一ツ^{ヒド}は費^{カス}とうね河^{カム}
又民の敷^{カス}ともうて田と穿^{アラ}ううね河^{カム}へ刻田^{カム}よのそ力^{カラ}
と入りてや向^{カム}却てどもふうとゆう^{カム}年一時
の利^{カス}と金^{カボ}うてま、のば^ヨの替^{カス}と強^スす者^ハあの農人^{カム}を
まとも吏^{カニ}もくとも達^{カニ}とひえりくの收^{ヨミ}とあまき
ひめの者^{カニガ}もく奸人^{カニレキ}に取^{アサフ}とて要害の地^{カニ}とし
うりしよもそのの地^{カニ}とあまきくの禍^{カニ}と食
すとせ活^{カム}もあれよト只^{カニ}利^{カニ}よ達^{カニ}工^{カニ}が故^{カニ}

支えられ國へ上りて政事の極ヤマと爲め事

墨ありよ已ヨツ、巧タクみれやとくよ術テラし他の因ヨロコ
敬ソドロサ鷺スズメ、耳アリと鳴ヨロコぬ者ハナシ、或オルちこ人ヒト見ミて
とうふタフ、或タマら亦カタかタスとすれスル事モノす前マサニ
墨モクありとタクりかタクてせの貴カミ、かカきうカキウかカとカる如シホ
自ジも用ヨウひよくて費カツ、
ノ第ノテラ

自らも用ひ多く費す
以外より、りきよびしきれども、御侍
延喜寺先貢の圖像と描りしめおんとぞりじき

縞やちりよてうしゆきわどア縞のいとをなす、とて
まつともおれり、まつもて脚て見くまねむかひわめと
新ノ清うきよんをめとしやゆふううそをまく
まゐの新あられとアリテツリマクシヒトカミキス
けくらゆうれと古益乃び貴久名内ノ墨跡を
の縞具又ハ茶器の倉やれわとせへいもむちびノ
御ぼきてしよやくをじれにまどりひしきをわえ
をやくるゆと改てせよとセナリト作られず、宣寫と
ト作るゆとと辨ヘテクニヤ

。奥列に豪深と云ふ所行を我心すも豪深ノ一、又

は地豪のうちには所行放の色あてりくにアリ、予曰、

豪深ハ出羽の内よ振サリ故因治師ノ移に

せゆオモツツでも居キテラシテの酒の旨味絶冠アリ
きざすと聖書にいふ財の事ヤアリ、俗に「了見」と云

ア所と云ひ列のくにヨリダニ財蛤アカハタ或ハ財蛤と云ふと云て固にハ

きざ見ヒハヤスと清アリヒル財行ヒキ財ウドシコ

リヒテウド同類至るアリテカラ財モ一種耳アリ

豪の字ハガリ用ひてうけれるアリテモ舞ヒモ財深キ

金ノ

。豪の梵語ハ伽耶^{カヤ}緹^ア易雄^アハ矛の長さ^カアモニ^カ雌^ア矛

縛に正僉アガアサト其文アシカ時ハ水中ミズシマより在て胸マツコと乞
相アシタツ給スル 本草アシタツ大聖歡喜丈の秘像ミヤウジヤウも是
モ其の如シテ也ベキも象ヨウの足アシ指アシを申スル所シテ也

虎ヒョウの足アシの多くアシハ非アリ

○獅子の胡語アフロを僧サウ伽ガ彼ヒと云スル頭カニラ大カニラに尾テ長ナガき
身カラと身カラ云スル我國獅子の繪エハハ似シマツテ有アリ

○澄水帛アシカハ見て曉アシカ能アシカ暑氣アシカと諭アシカ龍綃衣アシカハ
軽カロくことと博アシカシバ一握アシカも盈アシカ満アシカ也アリ 杜陽編アシカ記
セアカタは重宝アシカの物アシカをあざれどもせす希アシカラムアシカを
欲アシカトアシカ者アシカも仰アシカば夏褐アシカ冬裘アシカのゆきり易アシカき

○身カラ体カラと敵アシカに完アシカ成アシカ者アシカ又身カラと錦繡アシカに
埋アシカ光彩アシカと輕素アシカに勲撫アシカす者アシカ人アシカも傍アシカ観アシカ貪富アシカ皆天
下アシカ人アシカの如何アシカ又もす終アシカり不アシカ能アシカ者アシカ也

○杜詩に明年此會知誰健醉把茱萸アシカ仔細アシカ者アシカと重
陽後菊アシカの會アシカ小常アシカけぬ身アシカと觀アシカ也アシカも往アシカこれかよ
鳴アシカ呼アシカ意花アシカの勝アシカと掠アシカて延壽アシカの客アシカ紅葉アシカの囊アシカ
と佩アシカで辟邪アシカの翁アシカと呼アシカ風葉アシカの身アシカりづまぐ
えアシカく身アシカをましり者アシカの植殘アシカ也アシカ氣アシカれり
綻アシカびて見アシカ秋アシカの身アシカを四アシカもうすく因アシカ蜀
東アシカの紅アシカ也アシカ

赤寶萼花荒徑色

鳥譙延奇辟邪名

東篋夢旧殘風去

獨逐飯雲聞鴈声

辛卯九日

○菊は家宋に後より香りと隠逸の名操
あく蓮の汚泥に清す水とわざと君子
の潔行に比す獨杜丹と扁茎の才子にして鄙
仕者爲通也として既とて乃至之窮通杜丹其居
ノして通ひとぞはく通かんじ懷にすれハ居る
蓮此時よ中する竹と匂と三花にうちてりらや

自疑自失自驚心却嗟斯人巧用心

獨有愛蓮堂上月分明照破此人心

朱先生の詩に同花十丈是尋常明月露冷無人見
や作はし意とく見を因子命辭の味と知るも

○程子曰解義理若一向靠書典何由得居之安資之
深遺朱子の口占に川原紅緑一時新暮雨朝晴
更可人書典埋頭何日不如抛却去尋春と云れ
一般の意う後の学者ハ教者の葛藤に縛せり
致すゆゑありとて空腹高心にて不立文字の段

とひぬせてもあ偏りつす

。幕下の士布衣と聽か既にう往の列とをやふじ
位袍もうし今歲^{レニ}の秋朝鮮の聘使入朝より
て布衣の士とちく番長近衛及^{シテ}帝刀名^{アサ}命
給ひた位の衣冠と服を^{カツ}。作^セりゆゑ
前相國公近衛東都より^{シテ}定^{サタメ}てうれ式^スをも
詔^トへぬ不^セと^リまする昭代礼儀のすばらに
之^{キヤウ}れどもわがけのれりのすばらしきに

。破壁燈沉鳴れあ虫乃音トカヒヒに限空庭月白荒露
露^{コハラ}に^{シテ}あれ中比枯^{ハシナ}ノ月^{シタ}も猿^{シマ}れり

。秋秋又遭十三夜 雲^{ムカシ}開^{ハシナ}来^{ハシナ}半壁^{ハシナ}光

一 諷殘聲古松影 素琴^{シタ}和渡^{ハシナ}入^{ハシナ}愁賜^{ハシナ}

夜深耿^{ハシナ}々々々夢成^{ハシナ}々々々寒雁^{ハシナ}々々々々

。貞觀格武目一用打接^{ハシナ}の書行^{ハシナ}也

。せよニセ寫の偽書多^シ近世作^{ハシナ}也^シ舊更大成れ^シ
大^シ國家^{シテ}害^シと^リ多^シ愚^シ視^シれを秘藏^シ日蓮

宗の僧ふとて神通と説く者聞ひて驚きし
京北唱導師故海我^{アカ}府^{ラシ}より來て教誨^{アハラ}を其辨流^{アハラ}をうごく
又れかままで之へ来て即^{アマタ}て印^{アマタ}度^{アマタ}せりひからぬ曰^{アハラ}在家比^{アハラ}
女誦經^{アマタ}はせんじうれを本なり只^{アマタ}よもゆる家爾^{アマタ}せよとひ
えり即^{アマタ}經^{アマタ}をし^{アマタ}詔^{アマタ}即^{アマタ}傳^{アマタ}の事^{アマタ}凡^{アマタ}般^{アマタ}教^{アマタ}轉^{アマタ}經^{アマタ}の事^{アマタ}をし
やされ^{アマタ}某^{アマタ}の經^{アマタ}を強^{アマタ}叮^{アマタ}ハ正^{アマタ}釋迦^{アマタ}蓋^{アマタ}度^{アマタ}蓋^{アマタ}聲^{アマタ}圓^{アマタ}會^{アマタ}に
引^{アマタ}也諸天^{アマタ}來^{アマタ}僕^{アマタ}比^{アマタ}念^{アマタ}は作^{アマタ}ま^{アマタ}文^{アマタ}々向^{アマタ}々分明^{アマタ}四^{アマタ}聲^{アマタ}こざれを
新本^{アマタ}の清^{アマタ}通^{アマタ}とよく分^{アマタ}ちあ^{アマタ}くこそ能^{アマタ}うす教^{アマタ}を寺^{アマタ}うて誦^{アマタ}
其經意^{アマタ}をよく信^{アマタ}解^{アマタ}もると誦經^{アマタ}の本^{アマタ}意^{アマタ}を世^{アマタ}方^{アマタ}經^{アマタ}を強^{アマタ}叮^{アマタ}ハ
詣誤^{アマタ}事^{アマタ}よ遇^{アマタ}き^{アマタ}寢^{アマタ}こなれて清^{アマタ}渴^{アマタ}育^{アマタ}うすこれぞ所謂^{アマタ}無智^{アマタ}詠^{アマタ}
肩^{アマタ}を嘆^{アマタ}よひし

經水田觀墓にリモ凡^フ佛書ほもかきしモ聖賢經傳を傳ひ人多^シ
々敬仰く自家の意^{ハシム}、願い^{ハシム}蚊^{ハシム}去の空紙と^{ハシム}大^{ハシム}描比不
肩と^{ハシム}咲^{ヨハシム}し

○九月十五日朝辭臣我^カ開東に^{ハシム}せら御^カ鶴^カ廬^カ駄^カ馬^カ府下に
奉^{ハシム} 侍馬惟高院 御^カ馬^{ハシム}五正駕^{フナ}正驥^{アシ}走^{リケ}正駕^{カナ}正
馬^{ハシム}寶^{ハシム}は駿足^{ハシム}

トテ^{ハシム}暮^{ハシム}ね船^{ハシム}よ刀^{ハシム}待^{ハシム}し 駕^{ハシム}人^{ヒト}三^{ハシム}人^{ヒト}中官^{ハシム}、綠衣^{ハシム}、乘^{ハシム}官^{ハシム}
縹衣^{ハシム}馬^{ハシム}下官^{ハシム}、白衣^{ハシム}青^{ハシム}背^{ハシム}子^{ハシム}を看^{ハシム}待^{ハシム}し 天知^{ハシム}弁^{ハシム}に召^{ハシム}す
きらひやかよ^{ハシム}と仰^{ハシム}御^カ鷹^カ二十四連^{ハシム} 笠置^{ハサツ}二臺 成時^{ハシム}の事也^{ハシム}

十六日明^{ハシム}セツ遇^{ハシム}よ路^{ハシム}と竟^{ハシム}待^{ハシム}

。八月廿四日の夜誓田代瀧上祀置一御芦今每月寄て燈明の大假
社よりきて一時よ燒一年每御芦寄て常御守年あけ
とくも候一例も空也と又此日岐阜比鶴寺大鳥居
て昭氏鶴禽鶴鳴騒一折り稻葉神社拜殿の屋より大
出で候にて亦希有比半段

○天孫本紀云宇摩志麻治命てせ建膽心大祿命二男大小
市連公小市直等祖云

國造本紀云少市國造大新川命孫子致命云云

梅子に大新川命ハ建膽心命也二紀世系累也

○延元元年の冬後醍醐帝山門より還幸れ後御出立はり
保曆間記と極すり北畠顯信朝臣伊勢國にて義兵

と奉事密に奏聞セラハ故帝北墨と奉じて
御出立

○皇年代畧記元弘日記衰書等延元元年十二月廿一日

と記す一盛代皇記云ハ正日書一公卿補任にハ

正日之事す太平記に八月廿日と書る、是誤也

八月帝は山門に在セテ十月十日駿山と出御あり

一 罢本章記に十月或ハ十一月 帝も野山一御奉納の御願
等御出立(立)ル所也 帝も野山一御奉納の御願
書十二月二十九日也 蔡善今金剛初、顯信楠正行と共に

内通くて如何に仰りて、完太に近年附まつてゐる
先づ府へ幸うさりて、傍事不容破はやうか
例過背ひて、次の年正月四日を氏を山に寄する
所に至る。今うちを於此三條河部大輔景繁とく
計ひて吉野へ降参あつた。

以の年正月四日新築廟社を縁旨と奉りて越前四
金崎に至り太平記にハ前年ツルリウム、允生利官保宇津宮將監泰藤
天野民部大輔政貞等松山ツルリウムに行て脇屋式部大輔義治と
大將ツルリウム、旗と舉て王の軍と初ツルリウム、太平記是年正月八日之事、二月八日の張子也
凡記録に年月日時の前後五觀書ツルリウム有是也

考一其様と云ふ可也

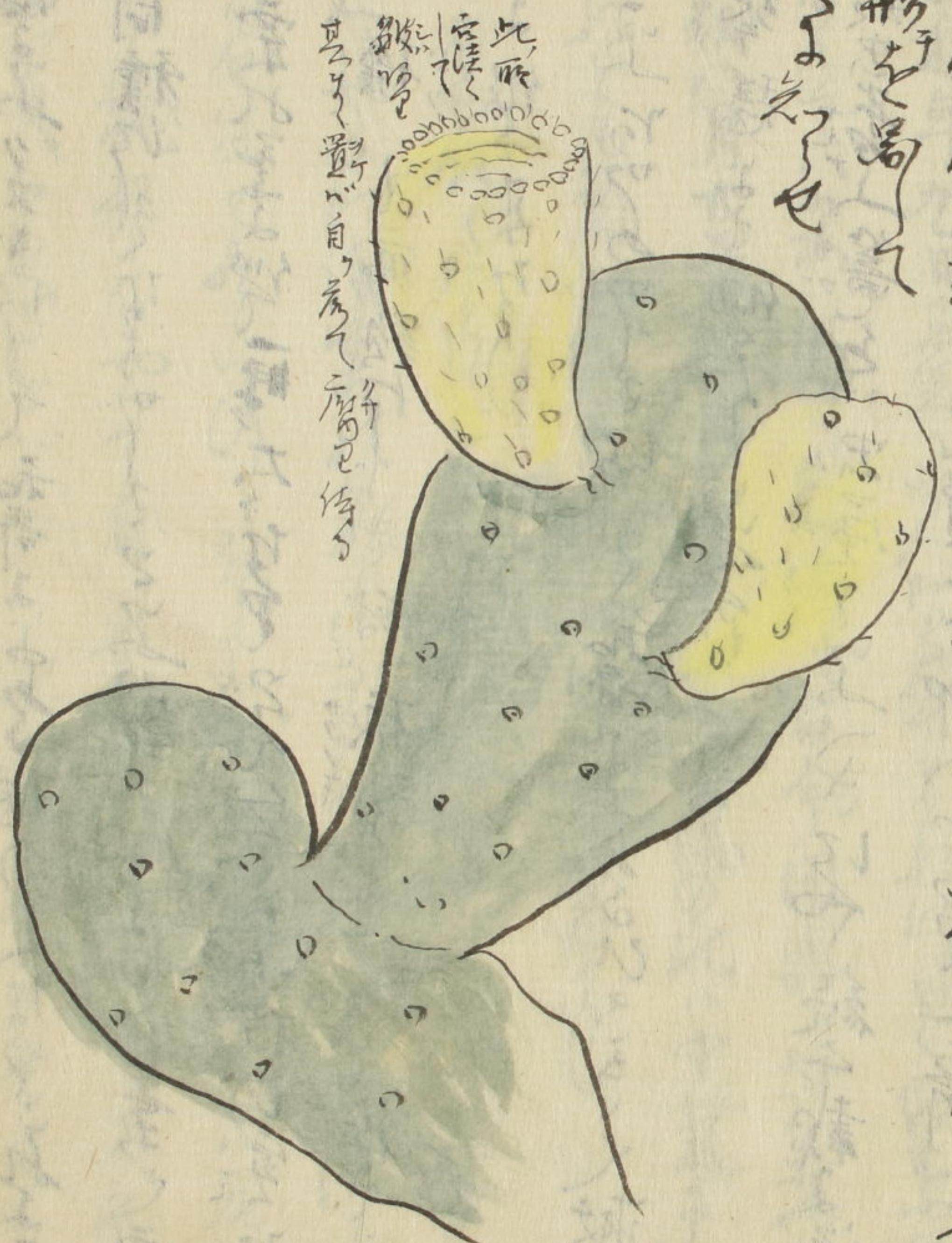
孔子曰、不教民戰，是謂棄之。賢君ハ將と折良將ハ能と擇て
兵器と用ゆ。三軍武と字で合ツルリウムして暴と禁ツルリウムして乱制す。以
夫君ツルリウムて將と折ツルリウムす將ツルリウムて工卒の能と知らず妄に諱令
りと云ふ。右ヤマニヤハ、何の用ツルリウムあらん。況や習練せざる卒
と云祭祀饗食礼等死生にわざわざする事も其智ツルリウムト
本に習ツルリウム有司事と令すも既に自人と使通と
云づ。類ハ事へ喰て必ずちつぱく失禮多ツルリウムて矣と
歎きよろくかづ。一小年ツルリウムども其黒量かづれ八年

成ナリしりへりやおれとおれや軍旅の事とお蓋カバ／
君將軍リヤフとおさずレといそうもと用モテひき工事し亦軍
術ツツとおさずレて宣教スケイコとおすレりとや給スルハ聖言セイゴンの教の字
小眼コロコとほくハ上能ヤモツ赦サシムとハ下シモこれと習練す軍陳シム
と心浮コロラブとおれと圓カクと浮ハラハラに教タマシムとゆで民通ミンツウに到アメルる

霸王樹トコロツツ 花史カハシに花實カハシの本ハタチ 花ハナハ先サキよアノウヘ書シテ一章イチジョウ
九月吊サクり 友曲劍葉代處カツツクシマサヒ處マツシよりちうレる實カハシと五六顆カハシ詰タマシム候マタタク
長ロハ刺ハリす金圓カネイチ身ヒを而ハシマ四寸四五分二毫ヨコハシマニ十二三泉色ツイサン柘榴ザツル
室シロれは乃ハシマ也ハシマ行ハシマ是ハシマやコトハシマから申ハシマ無花果モクモクを吃ハシマる

子ハシマ刺ハリ多ハシマくして撫ハシマかし化ハシマすハシマハ刺ハリ廣ハシマて虧ハシマがすと
子ハシマ多ハシマく併ハシマくハシマれば一顆ハシマ乞ハシマぬて極ハシマ待ハシマんハシマとす
子ハシマ多ハシマくよハシマせ

候ハシマ



解ハ俗ニクヌナリテ和哥ヨリ多キ楠の木ナリトニモ大丈
里又同種レシノリカマツニシテ前ノ所候ニヤシ事あく粟井モチ
ヒテ、粟井ニシテ候、大キナモアシギモアシギモ小枝コナラの實ヒナキ
諸カラ標イナシも亦類ウドキ樹モモ桺サツノキとも一位ト称ゼシれハ
翁シテニ修シテル所シテ

。林、俗よ子やかあか。さしに、和音よすあるひやかく。歌聲本
アズ
草よ琴子瑟よもいふくことく

松虫銓宏考
筆と虫屋と
氏久宏屋とゆうて清季卿へかく見し者
君此あふるもかくゆきむじきのれ虫水之

○菊は重陽の節物紅葉、季の觀^モと詩^モ詠^モ侍^モ
そぞろ近年九日は菊^{コトレ}はうんぢ年より紅葉亦秋
音^モな^モで、又^モ氣候も古今同^モがる也
今秋^モ八月廿日九月節^モて重陽の比、中氣よ近く
侍^モ菊^モも菊^モは^モ日比^モや、望^モ

きてももむけりとみ去年 実種せ 菊の生ひえ
花も大キやうに濃紫れタリ つるとうれりあ
えが名付ケてみらひわくよ御紫の意をさへ天龍寺
へゆきかれてくわざ自ラ筆してゐとせし又單り
りて白青をもむるとハ多、シテ其とそぞらをりて

草^{ヒトツ}は藍^{アシ}それらへ小^{サブ}心衣^{ハラハラ}にてそぞらかひいじへふらの花^{ハナ}を乞
りく今年も宣^{スル}下^{スル}邊^{カタ}るを候^{キテ}ひも思^{ハシメ}れど
ちく神^{ミソチ}へ一^一りよあらんてぢづなうかみすうりも済
端^{ハタケ}元^{ハタケ}鈎^{ハリ}食^フあもと上^{アモト}花^{ハナ}をささんのがのふとさまくわざと
ましむがうる

ヨリあれすよ松^{マツ}とやみなが山^{ヤマ}にけあはれぬれども
あか志衣^{アカシイ}今^ハあぐれやくねともほくく船^{ボウ}あ山^{ヤマ}乃
名^{ナミ}をそかのさくのまくとやヌエのときまくと
難^{シラ}飛^{タマ}とすよと重^{シタマ}ぬれぬ難^{ハラシ}の海^{シマ}でこそとれ見^{カイ}ひ
うさん千^{チヨ}せのわすへ鳥^{トリ}のうて今^ハかひはまく伊勢^{イセ}の海^{シマ}

袖^{アシ}ゆせうそ、うつむきりん原^{ハラ}佐^サまつとじまくひうじ
もひきれりとゆを辭^{ハセ}川^{カワ}少^{カヨ}衣^{フニ}をとづれ^ゲ名^{ナミ}行^{ハシメ}
えじハ柳^{シロ}れてアスギ^{アスギ}にとまもく、かわ

ひきゆきと音^{ヒナギ}よか、あさま夜^{ハグロ}かづかねづれづれ

馬^{ヒコ}の一歳^{ハコ}と駒^{コトコ}とひ二歳^{ハコ}と駒^{コトコ}と我^ガ俗^{ハコ}三歳
四歲^{ハコ}なるも駒^{コトコ}とひ^{ハコ}と駒^{コトコ}とひ^{ハコ}と駒^{コトコ}とひ^{ハコ}と五^{ハコ}と上
六^{ハコ}と馬^{ヒコ}と駒^{コトコ}とひ^{ハコ}と駒^{コトコ}とひ^{ハコ}と駒^{コトコ}とひ^{ハコ}と一^{ハコ}と
。今度朝鮮^{ハコ}乃聘使^{ハコ}まよあら^{ハコ}國東^{ハコ}番長^{ハコ}近衛^{ハコ}の官^{ハコ}と
金^{ハコ}一^{ハコ}珍^{ハコ}其^{ハコ}貞^{ハコ}八^{ハコ}人^{ハコ}うれ^{ハコ}定^{ハコ}を教^{ハコ}よ^{ハコ}帝曰^{ハコ}撫^{ハコ}閔

乃隨身。番長二人近衛三人允八貞子利^{スバテ}御准拵も情^リ
利^リや。番長ハ駆馬近衛ハ安^シ利^ス随身宣下ニ五石近衛番長吉^ス人近衛名^ス人
ノ才我^ク利^ス也^ト。

我公室御隨身六員ナ利^ス御^{ナラジ}言參議^ス隨身^ス管^ス六人

比事^ス弥安^ミ礼^ス節^ス等^モス^ル。

比叡山延暦寺近江國志賀郡内所々都人五^ス千石目録石^ス別書^ス

事^ス永代今^シ寄附^セ景^ス全^ク可^シ破^ス寺^ス幣^ス之^ス條如^ス件

慶長十九年七月十七日寛康御判

山門三院勅^{セイカツ}代

山門三院^スハ東塔止觀院西塔宝幢院接^{ヨウカ}川^ス櫻嚴院
也延暦寺^ハ一山三塔^{アサヒ}也^ト。

山門凡^テ二百二十石^引鳥封五十石内東塔正覺院一百石
西塔正觀院平十石橫川惠心院五十石^ト併^シ其他無
院一千九石^モ充^{アシ}竹^ス。

延暦寺第^一祖傳教大師^{松葉^{シロバ}淨^ス}分^二祖義真^{ミタマ}尊^ス有^ス三^也

慈覺大師^{前唐院}

慈覺^ス以^シ法流^ス教^ス流^ス又^シ守^カ而^シ謂^ス法滿院流

利生院流^ス三昧院流^ス等^{アリ}又^シ塔平西教寺一院中^スて淨^ス
土門^ト掌^モ燒城^ス二箇院^ス西山^ス善峯寺^ス三鉢寺^ス及^シ洛^ス還^シ迎
院^ス廬山寺^ス等^ハ大台真言律淨^ス士の四字^モ無^シ字^モ無^シ生^ス之

明^ス寺^モ亦^{古^{タク}}、四字無^シ字^モ利^ス今^シ、唯^シ淨^ス古^{タク}也^ト。

性豪爽にて酒食野の三車とて常る其後少洒了む
時のくこねを三車法師といひ一宇今より有りし御國
親鸞にあよゆ

。拾芥抄より度流りの如ヒ歎禁より蘿民将来子孫也の二字と
我そ今祇園社は小簡と専賣する備後風ち紀の泛ち者
我國久くもあらず近世孫嫡子もすもけ造風小濱高
化衛子ともも仰う東都の俗風さら六八首歌内に
高トツくとくとくと下劣の事ナリ今貴公も因ひきよる
ふれハ信部人日上乞説牛天皇陽の饅ミタチされ夜をヤツアモリハヒヒトドモ
大饅節物の時食にて舗會比饅ミタチ元正又饅模乃び

白散を仰え和漢久々勝葉ヨシナガアラシトコムをのちと
頑ワカツぬくもなく侍る凡タカサ瘦瘍ツカヤミ疣疾ハラマニハアリテノ病痛
茅にも其キトばひ局と名て敷ハラシアリ恩俗めゆの半と
一ト千よつも多矣ナリこれより墨跡通士の人と號アサムる達
意アシハシ君字正人乃歎アシハシト申仰アシハシが伝者望よ醫術多け
とども甚感應アシハシアリ至アシハシてハ醫術も亦誠よ歎アシハシ
されば何とくか此と云ふ事も無く其令子安一子よ生れ也
生涯とはくとくとくらまわりれ世人病と怨アシハシ死と怨アシハシ
りゆゑでなくしてはくとく感をかね給る今大家富豪の病附アシハシ
荷章山のやく接アシハシ巫醫アシハシ市のやく接アシハシ川まる祈待室アシハシハ醫術詮
フダマモリ

タテテアモレハ太麻^{ミスカ}毒^{クニ}殺^{ジユ}束^ジ固^トレテ御^{アド}め^ア醜^イ陰^ヒの隕^{ヒガラ}
リ^アけよ^ア迎^ア御^アテ^アシハ僧^{アト}法師^アの活^アれ^アゆ^アり^アゆ^アるも^アの
ふの^アう^アぬ^アよ^アれ^ア

○長州東間^カ國^ノ北一里^ハア^リよ^リ翁^{スヂ}の屋^ハア^リ所^ア有^アリ^トア^リ
天^ア然^アの奇^ア石^ア子^アア^リう^リ國^ノ海^ハア^リ饅^ア頭^ア石^アア^リ奇^ア妙^ア待^ア
遠^ア路^アの^ア石^ア子^アア^リう^リに^アて^アも^アく^ア那^ア村^ノの^ア石^ア子^アア^リう^リ
山^ア城^ア比^ア廢^ア都^ア幸^ア幸^ア鏡^ア石^ア寶^ア之^ア度^ア今^アま^アし^アく^ア那^ア村^ノの^ア石^ア子^アア^リ
葉^ア前^アの^ア石^ア子^アア^リ鳥^ア帆^ア船^ア柱^ア石^ア新^ア教^ア學^ア又^ア西^アの^ア石^ア子^アア^リ
サ^アや^ア我^ア尾^ア南^ア多^ア多^ア新^ア石^ア新^ア使^ア候^ア了^ア石^ア新^ア近^ア江^ア國^ア老^ア
曾^ア村^ノの^ア也^アも^アう^リ新^アよ^リも^アみ^リハ^ア石^ア子^アア^リう^リも^アあ^リす^アお^リ

○海^ア鮪^ア和^ア名^アイ^サナ^トトリ
の^ア鷹^アウ^リ、^ア角^アウ^リ、^ア又^アも^アと^ア黒^ア石^ア子^アア^リ大^ア和^ア本^ア
草^アよ^リ是^アよ^リ、^アと^アう^リ、^アれ^ア石^ア炭^アア^リて^ア智^ア多^ア那^ア石^アう^リ

○海^ア鮪^ア和^ア名^アイ^サナ^トトリ

首^アハ^アモ^アリ^アそ^ア突^ア半^アを^ア乞^アう^リそ^ア射^アる^ア犯^アー^アて^ア浦^アよ^リ
そ^ア射^ア浪^アト^アシ^アモ^アい^アさ^アな^アと^アモ^アハ^ア青^ア便^アな^ア利^ア

近^ア安^ア湖^アヨ^リイ^サナ^トトリ^アと^ア和^ア名^アよ^リ、^ア

破^ア棄^ア石^アア^リ、^ア海^ア鮪^アト^アア^リ

○阿^ア暇^ア我^ア國^ア大^ア陸^ア二^ア種^ア有^アリ^アカ^アマ^アイ^アト^ア、^ア大^アキ^ア行^アて^ア遍^ア身^ア刺^ア
味^ア厚^アア^リ毒^ア多^アー^ア奥^アう^リハ^ア少^ア行^アて^ア刺^ア、^ア味^ア輕^アく^ア毒^ア
大^アト^ア又^ア一^ア種^アア^リゆ^アぐ^アト^ア、^ア形^ア正^ア常^アー^アて^ア肩^ア細^ア

に新皇のやく達矣に
上下コ魚一枚てカ、豚白フ
トテ刺身も又青葱く莢を
辛シキ味不以テ酸シ、れ
毒ナリムも下品ナリ



精奥河豚之属

。凡ツ毒鳥多是ハ河豚也ミ俗ニ有ル者之曰毒鳥也
本草云海薑ハ其毒鶴より起ル云々又我俗西國より
シカテノジラ有ル其頭大如^{ヤナガ}背^{シテハラ}五鬚^{テハラ}其腹^{シテハラ}子二足
ノ羽毛を失^レトハ毎^チ死^ム也とぞりん

我國ヲル日の事アリ。凡テ至鳥ノモウニテ草木等アリ
類多ヒテ。シ正字ナリとも通用ヘテ、人ニテ之文字を
書ハシの感シモナリ。又人語ヘテ、語ニテ信ム。ジハメ

○僭テツ 犹タガ 錫セニ 音失去声 此二字印シテツ 之を信也ヤヨハ

准サク 又價サシ 音賛 と得アサマ 用ヨウ す。

○參南堂芳上人一枚起請詔訓補と逐アカハハ て、
以シ あこられし五ゴ 手ト 。

○水駒ミホ 樽ワレトハ 自我者サ 不捺海士アマシブ子 十九マニシブ子 舟真帆マニシブ子 吹造風隨マニシブ子

○北極出地之別

○日本北極出地ナキ 三十五度太 南極入地ナカ 三十五度太

○清北極出地ナシ

○北京四十度太

○南京三十五度金

○梅子シモ 日本と南京と大槻等ヒトツ 之れ

○朝鮮北極出地ナキ 四十度

○北京ナシ

○琉球北極出地ナキ 二十七度

○極南方の地北京ナシ

○主より今も元月ナニ次ル月乃ト云々と云けり。之に
柴シモ のニアのアビナビ カリ。月ナニアレ。又書キ。之給れ。之に
齋シモ にてゆきひづく門小アリ。入て月ノミ秋の夜アリ。

○元至順辛未福建廉訪使密闈汝求仙詩に

刀筆相從四十年
非非是是刀子々

一家富貴子家怨
半世功名百世懲

牙笏紫袍今已矣
芒鞋竹杖恁悠然

有_テ人問我蓬萊事
雲在青山水在天

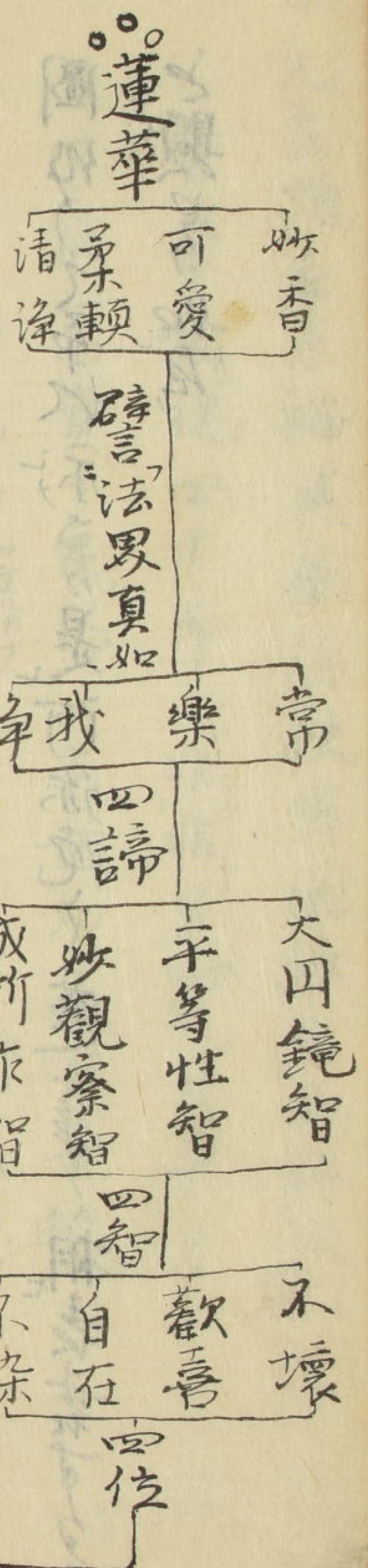
○元將_テ都下有_テ罵玉郎曲極_テ其謠諺之狀蓋是宋間漢上之風居變風之極鳴呼元人之情以此可知

○或人問叔氏合宗_テ祖多他派_テ自家_テ張大_テ与_テ和尊_テ名_テ背_テハ何_テ也曰_テ瑜伽論_テ曰_テ或_テ爲成_テ立自宗_テ或_テ破壞_テ他宗_テ或_テ爲制伏_テ於他_テ或_テ爲摧屈_テ於他_テ建_テ立宗義_テ又曰_テ開自

伏_ス他_テ此等_テとあくろひて我執_スく自勝他方の念に沉む_スづく日蓮_テ如_ク是_テ也瑜伽_テ意_テハ彼_テ如_クに非_ス文_ス哉_テゆ_スて意_テと害_スト_スかん

○弘教和尚_テ金剛智三_テ教_テ稱_テ也辨正三_テ教_テ不空_テ傳授_テ大師_テ我圓_テ山内供_テ諱祐_テの異_テ稱_テ也

○安然_テの對授記覓超_テ東曼荼羅事_テ等金胎兩界_テ委_ス。新氏蓮花_テと以て種々にたゞ_ス或_テ傍_テ世親_テの撮論_テ等に依_テ一圖_スして而_テ示_スる是_テ阿弥陀_テ蓮華_テ相_テ表_スす。身_テと顯_スる如_ク也



無量壽如來

甘露王如來

觀自在王如來

清淨光如來

清淨金剛

三昧耶形、葉開敷赤蓮華
弥陀種子、自性清淨吉哩字

其全財阿彌陀如來 其大用妙法蓮華經

○相列錦倉伍介谷光明寺開基良忠記主禪師父御堂開白
過去帳年月名鑑よりア按至れ道長ハ後一條院一力寺四年
に薨キ良忠ハ後宇多院弘安十年又寂セリとす間一百數十
年也といひんヨク禪師の傳と云ふバ道長八世の孫なるよ
ソモ又系図と換びる事

道長

御堂開白

賴通

宇治開白

師實

京極攝政

經實

贈大政查

經定

權中納言

賴定

參議正三位

賴房

左中將從三位

記主禪師

女伴氏

禪師 正治元年七月二十七日石川三隅庄より生る十二歳
乃時 宏別^{カリエ} 墓廟守より入て月珠院 信達上人の歿すと
ちうて天台と号し中比^{カミヒ} 尊觀上人曰ひ源朝闇梨^{カツル}
候て真言を学び又景西禪師比附^{ヒフ} 景朝禪に
謁^{スル} 禪^{スル} 素^{スル} 又後^ハ 禪師は更成^{スル} と津と名す
晚よ能^{シテ} 繁善寺の開祖^{ハシキ} と之の室^{ハシキ} 入^{スル} 禪^{スル}
よりこれ和羽蓮社の才^{ハシキ} 之^{ハシキ} 弘安十年七月有^ス
鑰^{ハシキ} 金^{ハシキ} 寂^{ハシキ} と年八十九^{ハシキ} 作^{スル} 論^{ハシキ} 永化元年七月
勅諭^{スル} 記^{スル} 禪師と号せ^{スル} 六一ノ般傳

七

